

学位論文要旨

氏名 藤岡 俊一郎



論文題目

Risk Factors for Progression of Distal Deep Vein Thrombosis

(末梢型深部静脈血栓の増悪因子の検討)

指導教授承認印

宮地 鑑



Risk Factors for Progression of Distal Deep Vein Thrombosis

(末梢型深部静脈血栓の増悪因子の検討)

氏 名 藤岡 俊一郎

はじめに：

2017年に深部静脈血栓症（DVT）に対するガイドラインが改定されたが、末梢型DVTに対する治療は抗凝固療法の適応を含め、エビデンスが十分ではない。末梢型DVTの中
枢進展の危険因子や抗凝固療法の適応について明らかにするために、当院における末
梢型DVT患者の治療成績を評価した。

対象と方法：

2018年1月から2019年12月に当院を新規に受診したDVTの患者430人のうち、末梢
型DVTと診断された253人から、すでに抗凝固療法が導入されていた41人を除外した
212人を対象とした。全例ただちに抗凝固療法は導入せず、弾性ストッキング、弾性包
帯による保存的加療を行い、2週間後および3か月後に超音波検査でDVTの性状を評価
した。

結果：

平均年齢は72±12歳で男性が64人(26%)。症候性89人(35%)、整形外科手術後が120
例(47%)、担癌患者が58人(33%)で、そのうち活動性の癌患者が50人(28%)であった。発

症時の平均 FDP $32 \pm 29 \text{ug/mL}$, D-dimer $10 \pm 9 \text{ug/mL}$ であった。2 週間後、3 か月後に超音波検査を施行できた患者は 189 人, 145 人であった。2 週間後の超音波検査で血栓の消失を 39 人 (21%), 血栓の縮小を 38 人 (20%) に認めた。一方で血栓の中樞進展を 12 人 (6.3%) に認めた。中樞進展を認めた症例はその時点で抗凝固療法を導入した。3 か月後では 75 人 (52%) の血栓が消失し, 30 人 (21%) の血栓が縮小していた。経過観察中に肺梗塞を起こした症例は認めなかった。保存的加療における中樞進展リスク因子について検討すると, 症状の有無や整形外科術後、術前であることはリスクにはならなかったが, 活動性癌患者 ($p=0.03$), Clinical Frailty scale >7 の長期臥床 ($p<0.01$), D-dimer $>8 \text{ug/ml}$ ($p=0.01$) がリスクとなった。

結論：

長期臥床, 活動性癌患者, D-dimer $>8 \text{ug/ml}$ が末梢型 DVT における血栓増悪の危険因子であった。危険因子を有する末梢型 DVT に関しては, 診断時から抗凝固療法の導入を検討しても良いと考える。